

もの間にはかなりの開きがみられる。これは、問題による難易の条件を考えても大きいように思う。第2学年では最高94.5%、最低は23.9%となっており、第3学年においても最高77.8%最低はわずか19.0%となっている。

更に、正答率の低かった部に属する間については、テストの形式からくる偶然正答者を考えた場合にはまことに問題である。

第2学年について正答率35%以下の間は7問であるが、中物理的内容の間が3、化学的内容の間が3、地学的内容が1、となっている。

第3学年についてみると8問中、化学的内容が2、生物的内容が1、地学的内容5、となっている。

このように各分野に正答率の低い問題がみられる。このことを明確にするため各分野の平均正答率をみるとつぎのとおりである

○ 分野別平均正答率

分野	第2学年			第3学年		
	男	女	計	男	女	計
物理的内容	49.0	37.3	43.2	62.7	53.7	58.6
化学的内容	43.0	35.0	39.0	48.6	39.5	44.3
生物的内容	64.6	60.4	62.5	52.8	47.3	50.2
地学的内容	49.2	38.1	43.9	44.2	39.9	42.2
実験器具	88.2	86.4	87.5			

上記正答率の低かった間と、この表を比較して考えると両学年共通に低かったのは化学の分野であることがわかる。

ついで第2学年の場合は、物理と地学が低い結果を示している。第3学年では地学の分野が低くなっている。

両学年をとおして考えると、化学的内容、について弱いことになる。しかし、問題別に考察すると、すべての分野に問題点がみられる。紙面の関係もあるので、詳細は後日に予定されている誤答分析の報告書にゆずるが、化学、を中心に問題の二三について例をあげることにする。

学年	問題番号	問題の内容	正答率
2	問小問 10 1	炭素の燃焼で、発生する気体を指摘する。	56.1
	10 2	亜鉛に希硫酸を注いで発生する気体。	33.1
	10 3	二酸化炭素の性質と捕集法の関係考察。	23.9
	10 4	電気分解で十極の試験管に集まる気体(図示)	37.2

3	5 3	空気の成分、混合物についての知識	19.0
	5 4	炭水化物の成分、基礎知識	38.2
	5 5	たんぱく質の成分についての基礎知識	19.2

この表からもわかるように、常識的な二酸化炭素の発生についても50%程度の正答率であり、第3学年のように物の成分についての間では、更に低い結果を示している。また第2学年の場合は、物質の性質と実験の方法を考察する間が最低となっている。このことから、つぎのようなことが考えられるのではなからうか。

- ① 物質について特性がよくとらえられていないのではなからうか。
- ② 常識的と思われる燃焼による二酸化炭素の発生についてもわりに高結果になっていない。化学変化についてよく理解されていないためではなからうか。
- ③ 混合物、化合物などについて明確に理解されていないのではないか。
- ④ 水素の実験のように興味もたれ印象的な場合も、化学変化をとらえさせたり、基礎となる知識を定着させることには、くふうが必要である。
- ⑤ 実験の装置や方法についての吟味や、関係考察力についての指導に改善が必要である。
- ⑥ 空気、水、炭水化物、水素、酸素など、より基礎的で生活に関係深いと思われるものについての理解が不十分である。

つぎに、第3学年でもっとも低い結果を示した地学的内容についてみてみようと思う。

学年	問題番号	問題の内容	正答率
3	問、小問 6 1	天気図の風向記号から風向を判断する。	34.8
	6 2	寒冷前線についての知識	71.0
	6 3	温暖前線の記号から実際の様子を判断する。	33.9

紙面の関係上第3学年だけにするが、この表からつぎのことが指摘されると思う。

更に、このようなことについては、単に3年だけでなく2年の場合にもみられることであり、他の分野の場合にもみられる。

すなわち、風向についての正当率が案外低く、前線の記号については高い正答率を示しているながら、実際のようにすについてはきわめて低い。まとめると

- ① より基礎的なことがおろそかにされていないか